我々はなぜキブツへ行くのか？

なんのために ● 制作部

新らしい私に向かって ■ 満江栄子
わが未来のために ■ 和田富秀
心で願うこと ■ 海野則子
自己の変革を求めて ■ 野口和代
施設のために ■ 村上睦子
老人ホームでの体験から ■ 半田　勝
労働の疎外の克服へ ■ 石川政実
イスラエルの土をふみたい（遺稿） ■ 須藤宝治

なんのために

制作部／上野允士

君はなんのために、なぜイスラエルへ行くのか？　私たちは、このようにキブツへ行こうとする人に問いかけ、そして同時に、私たちはなぜグループを送ろうとするのかを自らに向かって問いつづけてきた。

第九回目をむかえたキブツ研修生は、この四月四日に羽田を出発し、モスクワ、ソフィア、アテネを経由してイスラエルへ向かう。三つのグループと一〇人に近い個人参加者をあわせ、総数約八〇人という数は、これまでの派遣のうちで最大の規模を持つものとなった。

研修生の数がこのように多くなったことは始めから予測されたことであって、それは協会の方針でもあった。私たちは、研修生が大都市から集中的に集まってくるだけではなく全国的に、特に地方からの参加者が多い方がいいと考えた。そのために、私たちは地方新聞や週刊誌の協力を求めての公募を行なった。

私たちは、もし条件がととのうのなら、一人でも多くの人がキブツに行くことの援助を行ないたい。問題は、協会があつかう人数の多小にあるのではなく、こうした呼びかけに応じて、どれだけの人間が行きたいと思うのかということでしかない。しかしながら、限られた人数で仕事をしている事務局にとっては、たとえば、グループ派遣の仕事にかかわっているとき、個人でキブツに行きたいと希望してくる人たちにまで手をまわすことができないという実情があった。私たちの側には派遣事務に投入できる時間に限度があり、これまでの基本的な線をくずすことなく、どれだけの人数を世話することができるのかという問題があったのである。

実感としてぼくは今、なぜ送るのかという問いを、今回キブツへ行く一人一人の人の顔を浮かべることなく語ることはできない。以下に集められた八つの文章にみられるようにだれもがキブツに行くそれぞれの理由を持っている。ある人々にとって、それは彼の生き方がかけられた決定的な行為でもある。私たちは、まさに私たち自身がそうであったように、キブツに行くことを必要としている人がいるということを知っている。彼らにとって〈行くこと〉が、現状の突破とひとつの前進を予感させるのならば、私たちは彼らのために何かできることをしたいと思う。

私たちの研修生派遣という行為は、ひとつの技術を習得するために、その技術分野においてより進歩した知識を持つ外国に、技術者を派遣する企業とは異なっている。キブツ研修生派遣において、私たちの意識の底に流れているものとは、それが現代の日本社会よりなんらかの形でより人間を解放した場所といえるのならば、それがどこであろうと派遣するであろうということである。体験から血肉化した知識を体得し、そこから各個人が新しい生きるための世界を発見することができるのならば、私たちの能力と状況が許す限りそれは人民公社であってもかまわないし、アメリカのコミューンであってもかまわないのだ。

派遣がグループという形態を取ることについては、私たち組織する側からと、グループで行くことを選んだ研修生の側からと、両者の理由を検討しなければならない。これに関しては、現実のワクのなかで実現可能な方法を取り、キブツの受け入れのワクの中でよりよい条件のもとで生活できるような方法を見つけることが要求されている。グループの形態は、それが求められる動機を再検討するならば、それは絶対的なものではなく、両者にとって便宜的なものであるということが理解できるだろう。

初めて日本をはなれ、海外での生活の経験がなく、キブツがイスラエルにあるが故に肉親の反対をうけながら、ことばに不自由な人たちがキブツに行くという目標を達成するために、グループを組織することは最善とはいわないが、より近道な方法であることを私たちは確信している。それは、未知の環境のなかにおかれた一人一人が、そこで生じるあらゆる事態にただ一人で対処しうるとは限らないという発想と結びつく。一個の人間の肉体は、大脳だけでは人間としての機能をなしえない。彼らは手が必要であり、足が必要であり、目が耳が口が必要なのである。グループのなかにおいては、一人一人の人間がその持ち味を生かして、この手や足や口のように機能するとき、そのグループは各個人が不足しあっているものを相補いながら自然な活動をすることができる。

しかしグループは、常に有意義な機能を果たすとは限らない。研修生が単独で生活していける基礎的なものを得たときに、グループは本来の役割をはたしおえる。この期間をいつに定めるかということでは、各個人の能力差や性格のちがいが大きく左右し、いちがいに決めにくい問題でもあるが、今回はこの期間を六ヵ月と定めた。いずれにせよ、バランスのとれたキブツ生活を体験するためには、キブツ滞在の全期間にわたってグループ生活で通すよりも、時間的な余裕があるのならば、単独で生活する期間を作ることが、より多角的なキブツ理解を助けることになると思う。

この半年にわたって、私たちのしてきた仕事は完全なものではなかった。多様な過去を背負ってくる多くの人々に対して、私たちのできることはわずかだった。自己の変革を希望し、将来にわたる自分の出発点としようとする人々に対して、私たちはキブツに行くことを世話することしかできなかった。不十分な成果しかあげられないものもあったし、こちらの手落ちも失敗もあった。そのために、研修生の人たちに迷惑をかけたことがあったことを反省している。

研修生の諸君は、自分がキブツを選択するに至った意識の過程をふりかえり、そこで直面した自分の弱さと強さとを認識しなければならない。そして、他のだれかが、他のなにかのためにキブツに行くのではなく、ここに立ちここに息づいている私が、この私自身のためにキブツに行くのだという認識を新たにしてほしい。

ここに掲載された八編の論文は、「私はなぜキブツに行きたいのか？」というテーマにもとづいて、応募の段階で寄せられたものである。これらの論文では〈私〉が、〈なぜ〉キブツに行きたいのかが述べられている。これを読む人々が、行く人たちの主張をどう評価するかは別として、個々の論文において語られていることは、特殊な例外的な内容ではなく、過去の研修生の意識にも共通して流れているものといえるだろう。そういった意味で、私たちはこの八つの論文をひとつの資料として、ここに提出することができると思う。

新らしい私に向かって

満江栄子

私の卒業した大学は恵泉女学園短期大学園芸生活科。丹沢の山のふもとの小高い丘の上の旧い建物、空気は澄み、鳥は歌い、何の苦労もない。そこは楽園であろう。親の暖かい保護のもとに、二百人の園芸家を目指す子女が共同生活をしている。

しかし私の目からみると、生きていて死んでいるという感をぬぐいきれなかった。自分の生活に満足し、あまんじ無気力になり、惰性で生活している。話すことといえば、人の噂とおしゃれのこと。そこには創造性も働く喜びもない。苦しむ人があまりにも多いということも、今の世の中がだんだん破滅に向かっているということも考えようとしない。主体性のない、誰かに動かされているような、そんな活気のない生活だった。赤ん坊の頃から与えられる、受身の教育をされてきた学生の代表的姿かも知れない。

時々、開拓当時の先輩をうらやましく思った。彼女らは異口同音に、一つの目的のもとに汗と泥にまみれての生活のことをいう。肉体的には苦しかったけれど、そこには自分の利益のためでない、何かを一緒に創りだしていこうとする創造の喜びがあり、毎日の労働が確かに喜びに通じていたという。

何か一つの目的を持ち、創りだそうとする時、人は自分の利益を求めず一致協力することができる。しかし人数が増えるに従い、他人のことは考えなくなり、自分だけの利益に関しては必死になるが、その他は無気力になり、惰性の生活が始まる。これはどこでも、必ずつきあたる問題であると思う。これは人間の本能であると思っていた。しかし私の学校は二百人の少人数だったが、五百人、六百人の団体がそうならず、自己の利益を考えないところで、生き生きと生活しているというのは、本能、本質だなどといってかたづけられるものではないのだろう。私はそれを教育のなせる業だと思うようになってきた。教育によって同じ世界に生きている人間が、どのように変わるのかをこの目でみたい。ここでこの狭い世界で一人もがき、あばれまわり、無駄な抵抗をしていたような気がする。結局彼女らと接点をみいだすこともできず、環境、教育の強さを感じさせられ卒業してしまった。

又私は父が牧師である関係上、小さな頃からキリスト教の環境の中で育った。人を愛せよ、人は上も下もなく神のもとにすべての人は平等である、という意識が知らず知らずのうちに身についているようである。人が平等でない社会から、平等の社会にするためには何らかの行動がなされなければならない。が日本のキリスト教会は口で人を愛しましょうすべての人は平等です、といっているだけでそれこそ何の埒もあかないような気がして、キリスト教から次第に離れていくようになった。行動したくても行動できない、そんなモヤモヤした時、学生運動が盛んになり安田攻防戦があった。それは私の目の前でくり拡げられ、彼らの一途な行動はまさに生きている証のような気がした。そして、マルクスの私的所有の廃止、農業共同体の世界に触れ、資本主義である限り、永久不変に続く権力と労働者の傷つけあいは、どうにも無意味に感じて仕方がない。

では今の日本の中で、どうしたらよいのかということになると、自分はぬくぬくとしたところで、貧乏な人はとか、これじゃいけないとかいっているのがたまらなくなった。自分も貧しくならなければいけないのか。しかし今の世の中で貧しさの真只中へ行ったら、食べるだけが精一杯で考えることができなくなるのではないか。日本で革命なんて不可能である。社会が変わったとして、人間なんていうのは、底知れぬ欲望を抑えることができるのか。お前は自己変革ができるのか。そんなことできるはずはない。

伸びる力も伸びなくなってしまうのではないかなどの空回りの空議論を続けるだけで、どうすればよいかの段階で解答を出すことができずに、みなサラリーマンになっていった。結局自分が傷つきけがをする勇気がなかったのだ。

いやもっとも人間らしい人間だったのかも知れない。現在私は結婚という問題を考える時、女性の生き方を考えざるをえない。現状では赤ん坊ができると女性は家の中だけのそ

れこそ家事だけに追い回された生活を強いられ、社会とのふれあいも絶たれていく。私にはとてもがまんができない。私は、女性は妻であり母である前に一人の人間であると考える。だれにも入ることのできない世界を持たなくてはいけないと思う。意気は盛んだが、現実を目の前につきつけられると頭が痛い。二十数年間、自分だけがよければよいという社会に沈みそうになり、それではいけない、これじゃだめだという気持に胸をつかれる。資本主義、革命、暴力、欲望、闘争心、無気力……一人だけあがいてもどうにもならない。何をなすべきか、どう行動すればよいのか、という言葉がぐるぐる回って、そして又そういう社会に沈みそうになる。そんなくり返しで常に不安定さをかくせない。自分は無理をしているのではないか、自分の欲望を抑えられるわけはない。平等平等ときれいごとをいっているだけだ。

友は「私は資本主義がいい。自分が働らけば働らいただけ利益がある。そうでなければ生きているといえない。欲望は発展への第一歩である。働らかなければ貧しくなるのは自然である。欲望を抑えようなんて、どだい無理している。」という。そうその方が素直なのかも知れない。弱くて何もできないくせに、でもどうしてもそれに賛同することができない何かが胸に残る。

自分が社会主義の世界で生きていく自信も確信もないのだが、不幸な人がいるというのはがまんできない。

そんな時、テレビで山岸会のあるアングルを見た。私はハッとした。何とみなが生き生きと自信にあふれて生きているんだろう。その表情は私の心にやきついて離れなくなった。

同じ時、キブツという共同体が存在し生活が行なわれていることを知った。もちろん、そこがユートピアの社会だとは、いいきれないかも知れない。工業の発展、人口の増加、まとめ役が支配者層にならないか、など。しかし、少なからず二十二年間考えていた、日本で現実化するのは不可能なのではないか、と自分で決めてしまっていた、そういう社会が、縮小された形で、キブツとして存在していた。

あるおばさんは、村で一人しか使わない石けんを、二年間分も貯蔵しておく。この品物は他の人にも売るからこれしかだめだよ、といってことわる。このように一人一人が自分の与えられた仕事にほこりを持っている。一人一人が考えることによって物事が進んでいく。結婚した女性が生き生きと働らいているという。

私が理想としている社会がどのように存在し、日本の今の現状の中で、どのように広げていけるのか。私自身が主体性を持ち、それぞれが個というものを持ち、さらにそれらの人々が、私的所有廃止の無賃金労働、無欲で働らく。あるいは婦人の解放のなされた集団の中で、自分が理想としていた社会の中で、自分とは何なのかを見つめたい。

二十数年間、自分のただ考えるだけの、あがくだけの不安定さから一歩進んで、そういう心に終止符をうち、何かをみつけだす、生き生きと生きるための行動の契機としたい。

キブツがただ理想に燃えた、すべてを満足させるものだなどとかいかぶってはいないつもりだ。苦しいこと、つらいことがそれこそ多くあると思う。しかし今の私にはやれる気がする。もちろん何事も自分から進んでしなければ、だれも何も与えてはくれないということは十分わかっているつもりだ。

以上がなぜ私がキブツへ行きたいかという正直な気持である。今の私にとって、いろいろな点からキブツという研修生活は大きな意味をもっているということが、わかって頂けると思う。

わが未来のために

和田富秀

私は人間としてキブツに行きたい。それは私の将来の生活設計の基盤の実践的確立にある。現在に於いて、我両親より授かった唯一の素晴しき財産、寛容と忍耐に関する精神を基に、理論的ないしある程度の実践的確立はなされ、私の生活は継続されている。

私は日常生活に於いて、精神生活を最も重要視する。何故に生まれたかは別として、何の為に生きようとしているのかを絶えず自問自答している。それは私に残されているものが死であるというような明確な解答は得られないにしても、私なりの解答は得られるだろう。人生とは一日一日の積み重ねであって、一日という時間的空間が如何に重要である事か忘れがちである。私は高校時代、環境と人間に関するテーマを扱った事によって、環境が人間形成に如何に重大な要因を持っているかと言う事、及び環境に対する感受性によっては可能性が無限大に展開するという事を認識したのである。そして大学生活に於いては、精神生活上時間的空間を重要視、その事を念頭に置いて時を過ごした。しかしその際観念的なものにとらわれないという事が必然的重大条件であり、人間の自然的普遍現象を把握し、穏やかに生きて行かねばならない。その為にも今日という時間的空間が存在するものと私は考える。

私はキブツの存在を六年前に知った。その後四年間の東京での大学生活でキブツに関しては、私なりにある程度は勉強して少しばかり知識を持っている。しかしそれは理論上の問題のみに触れただけで、実際どのようであるかは知るよしもない。

キブツの精神は本当に素晴しいものがある。だが理想的であるだけに、私達の感覚からは現実離れをしているとも言えるのではないだろうか。それは現代社会に於ける我々の人間不信という内面的なものに起因するものであるかも知れない。現実離れしていると言う事に関しては、生活（歴史的）環境よりの感覚的相違によるもので理解出来ないという事なのであろう。

大学を卒業して私は本格的就職はしなかった。私が何故就職しなかったのかについては触れない事にする。卒業後半年、現在私は動物を扱う内容の仕事に携わり、最低限度の生活を送っている。私が何故動物を扱う内容の仕事を選んだのかと言うと、人間という動物を考える上に於いて、種々の習性を持つ動物達は一つの素材となり、人間以外の動物に於いても環境が重大な要素を持つという事等を認識させられたからである。また動物と接する現在の日本人に関しても動物を通じて知る事が出来るのだ。最低限度の生活を送る事は、私が今後生活を送って行く上に於いての重大な要因でもあり、またキブツに行く経費を貯える為のものでもある。現在仕事に関しては、

労働時間が午前十時より午後八時迄、昼休みが無いので実質十時間、時には午前九時より午後九時迄の十二時間労働が三十日間も続いた事があった。仕事内容は種々の動物を対象とするだけに余りにも複雑、でも毎日忙がしくも楽しく働いている。何しろ素晴しき仲間が居るからとても楽しく働ける。

私は友としての仲間を重視する。お互いの思いやりがよりよい人間関係を作るのである。

私はキブツの理想には憧れない。私には私の理想があるのだ。それは人間としての個人的理想かも知れないが、ただ言える事は無限大に広がる可能性の中より、私の信ずる可能性の道を歩む事が私の個人的幸福である。しかし私の理想もキブツの理想も人間性に重点を置き人間の幸福追求に努力しているという点で変わりは無い。でも私が感覚的に新たな精神世界を持つ為に、キブツは私にとって知識（理論）だけでなく、体験的要素が伴わなければその知識（理論）も意味を持たなくなってくるのだ。

これ迄に記述したように、私にとってキブツでの生活体験は、現時点に至る迄に行なわれて来た精神科学の分野に於ける自己への追求、現在に至る段階を基にして行なわれるであろう。それは人間としての寛容と忍耐の極限、食のみを考えた最低限度の生活体験による生活原理、自然社会現象に於ける普遍性の把握、認識よりの出発（自己内部）、環境と人間、疎外と連帯、教育に関しては教育の根源的問題などについてもキブツを通じて触れる事であろう。私はキブツに期待はしない。またする要素もない。ただある事は観念にこもらない感覚的視野の拡大にある。そういった意味で、私は時間意識内に於ける可能性範囲で出来る限り多くの事をキブツで吸収したい。我未来の為に。キブツ研修は私にとって人生の一つの段階であり、私の人生の軌道にキブツが存在する以上、私にとっては重大な事なのである。

心で願うこと

海野則子

九月七日の新聞でキブツ研修生募集の見出しを見た瞬間に、行こう、と決意し一日中胸の高鳴りを抑えることができませんでした。まさに、近頃私が漠然とながら求めていたものとぴったり一致したのでしょう。キブツでの生活があれこれと想像され、夢は次々とふくらんできました。

私が初めて「キブツ」の名を知ったのはもう六〜七年も前で、男女共働き、子供の完全集団教育などに興味をおぼえましたが、その頃は私にとってイスラエルはあまりにも遠い世界のことであり、又社会意識も低かったのでしょう。その興味は更に発展するまでにはいきませんでした。その後、時々キブツに関する小文が目につき、その歴史的背景なども知るようになりましたが、今年の七月に『キブツの子供たち』を手に入れ、続いて『キブツ・戦争・オレンジ』、『キブツの記録』を読むに及んで、今までは多分に観念的だったキブツのイメージが、具体的な日常の生活のイメージとして鮮明に浮かび上がり、感動と羨望の思いに充たされました。又最近『青春の北京』（西園寺一晃著）を読み、中国の著者の思想と生活を知ったこととも重なって、私は改めて、人間社会の理想について考えさせられたのです。最も羨しく思ったことは、中国やキブツでは、老いも若きも誰もが、真剣に自分達の理想を追求し、心を開いて話し合い、よりよい政治社会を作ろうと積極的な姿勢で取り組んでいることです。そこでは、自分の幸せは社会の幸せと深く結びついており、且、その社会を作っていくのは自分たちなのだという自覚を、誰もがもっているのです。何と素晴しいことでしょう。隣人同志は敵でも競争相手でもなく、苦労も喜びも分かち合う同志なのです。

これらの社会を見、再びわが日本を顧みるとき、あまりの違いに深いため息が出るばかりです。ただ怒りをぶつけるには、あまりにも複雑に組織化されてしまった社会です。ここは私の愛する日本でありながら、時には、まるで親に傷つけられた子供のような悲しい思いをするのは私一人ではないでしょう。

私は大学時代に特殊教育を勉強し、今も社会福祉を学んでいますので、尚更つくづく、今の社会の矛盾を痛感します。

資本主義社会にあっては、社会福祉というのは、そもそもの根本思想から存在矛盾を抱えているものなのです。最近ようやく福祉の重要さが呼ばれてきたとは言え、それはあくまで弱肉強食の不平等な社会の存続を前提とし、あるいは固定化するために、仕方なくとる手段、あるいはごまかしであり、決してその限界を越えてまで国民の幸福を願うものではありえないのです。ですから、歴史的にはもちろん、現在でも、福祉行政の内容は驚くほど貧弱であり、且つ真剣な取り組みを欠いた穴だらけのものであることは、むしろ当然だと思えるのです。今の社会にあっては、福祉は、単に慢性的貧乏人救済の問題ではなく、ほとんどの国民にとって、生活の危機はすぐ隣り合わせにあり、将来に待ち構えているのです。現に、どれだけ多くの人が生活に苦しみ、不安の中に日々を送っていることでしょう。健康に注意し、まじめに働いていても、一度病気になれば生活は極度に破壊されます。又交通事故、公害、労働災害等はもはや他人事では済まされなくなっています。その上、マスコミの堕落は、私たちの精神までも蝕んでしまっています。

一体どうしてこんな社会になってしまったのでしょう。一つには確かに、資本主義の発展の必然的結果であるといえるでしょう。そしてもう一つは、私たちの責任も大きいと思います。

このような政治体制はそのうち自滅するでしょう。けれど、このままの勢いで私たちが押し流され、じっとしていたら、もし今の社会が崩壊しても、そこから別の素晴らしい社会が誕生することなど期待できないでしょう。それどころか、苦しむのはますます弱い者ばかりで、もう取り返しのつかないことにもなるでしょう。現在、社会の堕落と共に、私たちもその中にひたり込んでしまっているのです。社会と闘うことも、自分と闘うことも、自ら放棄してしまっているのです。何とかこの辺で、私たち一人一人が本当の自分に立ち返り、真の幸せを求める心に立ち返って、私たちの社会を見つめ直し、我何をなすべきかを問うてみる時だと思います。

一方、キブツや中国の歴史を考えるとき、ここまでにきた歴史の、何と悲惨で、長く苦しいものであったかを知ります。社会主義社

会や共同体社会の実現は、単に夢想の産物ではは決してなく、まさに血と汗の結晶なのです。だからこそ今でも、自分の国、自分の社会に命をかけることができるのです。

日本のように、物質的にも、精神的にも破壊寸前状態に陥りながら、同時に、ここまで個人主義が徹底した社会で、果たして共同体意識が再び生まれるだろうかと失望しそうになりますが、人が心の底で願っていることはきっと共通していると信じます。日本には日本の歴史過程があり、これからもそれを土台にして、日本らしい理想社会を築いていきたいと願っていますが、その意志を固くし、自らも堕落している社会意識をよびさますために、キブツで生活して、その思想を吸収してきたいと思います。

又、キブツに行ったら、子供の集団教育についても研究してきたいと思います。キブツの集団保育、教育も、もとは女性の労働力の必要性から出発したもののようですが、今では教育的観点からの、より積極的な意義づけがなされていることでしょう。私は現在、障害児の幼児教育に関して少し仕事をしていますが、日本の教育問題の中で、乳幼児の集団保育の問題は、今後更に注目され、論議の的となるでしょう。それは、婦人の労働の問題と切り離せないことであるし、又子供の数が少ないこと、遊び場がないことなどとも相俟って、少なくとも今のように、単に共働きのための保育所では済まされなくなります。とくに、0～3才児教育については、真正面からの論議研究がもっともっとなされるべきでしょう。もし、キブツで本当に集団保育が成功しているとしたら、その秘訣はどこにあるのでしょう。根本をつきつめれば、共同体思想と、政治経済組織に行き当たるでしょう。けれどたとえば、親子間の心理的問題はどのように解決されているのか、保母さんにはどんな人が選ばれ、子供とどういう接し方をしているかなど、具体的なことにも、非常に興味があります。

その他、キブツでの労働に参加することは、日本のような資本主義社会での労働とは違った人間らしい素朴な労働の喜びを知る機会になるでしょう。汗を流して働いてきたいと思います。

イスラエル、中東状勢は、かなしいことに今だに戦局の中にありますが、戦争を知らない私にとって、そこでの体験はきっと、人間を見る目を深く鋭くさせてくれるでしょう。

自己の変革を求めて

野口和代

不合理もまた合理であるという気がした。環境に慣れるためにはそれも必要なのだ。特に教員生活はそうなのかもしれない。環境に、自分の置かれた立場に慣れようと努め、生徒の中に飛びこんで生徒と一緒に考える教師になりたいと懸命になっていた教員一年目。毎日あわただしく、時間が欲しいと思ったこともあり、そしてまた時折ポカッと穴があいたような感じになったこともあった。どうしてそうなるのかよくわかっていなかった。日常の生活の場面、場面において懐疑的になってきた。それと同時に充たされるということはなくなって、自分自身の存在すら疑うこともある。それまで充実しているかのよう思っていたのは、ただ忙しいということで錯覚していたにちがいなかった。

教育というものを考えず忙しさに身を任せていた頃の私は本当に何も考えていなかったと思う。いま、このままの生活を続けていくことは自分を偽ることになると思っている。

教師という職業に対して、まだまだ特別な感情を世間では持っている。それに甘えても十分生活していくことはできる。しかしながら私の良心――敢えて良心と呼ぼう――は許さない。この安定した生活には満足できない。何か足りないのだ。自分自身を裏付けるものがないのだ。そのために、今年になって何度か現状から脱出しようと考えたが、私は何も行動を起こさなかった。逃避は自己に負けることになるという美名のもとに自己の正当化に努めた。それは現実も自己も打破できない無気力な私の姿であるが、ここになって決心が固まった。精神的に充たされない人間程、だらしないものはない。私は精神的支柱を求めるために――これが自己の変革になるはずだ――キブツ研修生に応募したといえる。

現状を否定するところから、私の人生はまた始まると思っている。自我意識のかなり強い私に、文字の上の現状否定や変革の思想は受け容れ難い。だが体験することにより、現状否定も変革の思想も具現できると確信する。

「私はなぜキブツに行きたいのか」、それを一言でいえば、自己の変革のためである。それだけのためならば、キブツでなくてもよい。世界の、いや日本のどこでもいいわけであるが、やはりキブツでなければならないのは、キブツという集団の持つ理念と行動に関心を持つからに他ならない。

例えば、キブツの基本原理の一つである、「私的所有の廃止」である。私はこれに最も深い関心を持つのである。そのことがどのように人々の生活に受け容れられているのか、そして、まだ行ってみたことはないが中国における人民公社のようなものなのか比較もしてみたいのである。イスラエルという国家建設のために働いた民族が作りあげた集団、キブツと、中国という国家の政策から作った人民公社、その共通点を見い出すことはむずかしいかもしれないけれど、私はその比較をしてみたい。

私の友人に三年予備校に通い、現在は東京芸大油絵科四年に在学している女性がいる。彼女とよく芸術と国家について論じ合う。そのとき彼女は芸術家といわれる人達、これから芸術家になろうとする人達にとって、国家とか体制は必要ではないという。またある本によれば、芸術家には無政府主義の者が多いとあった。もし、キブツに生活する者の中に芸術家と呼ばれる人達がいるならば、彼らの考えを聞き、キブツにおける彼らの役割、位置はどうであるか、キブツとイスラエル国家の関係を彼らを通して知りたいし、それが「私的所有の廃止」とどのようなかかわり合いなのかさぐってみたい。

現代のように機械化された社会にあって、人間は人間性を取り戻そう、自然に帰ろうと運動している。ところが、自然に帰ろうとは叫んでも焦点がぼやけていると思う。原始社会へ後戻りするわけではないから、物質的に精神的に自然に帰るためには何らかの方法を取らなければならないはずである。キブツにその方法を見い出せるかもしれない。高度に機械化され、それに伴って分化された人間、

歯車のような人間に共同体社会という思想が受けいれられるためには、何がどのように必要であるか、殊に日本という国家の中で育つための要素を見い出さなければならない。そのことは、結局私自身の変革のためなのかもしれない。また論点は離れるが、私の今日までの生活に少なからず影響を与えていると思われる聖者――結果からみて最も感受性の強い高校時代に接した――の思想がキブツの中で生かされているかどうかも知りたいことである。次に、現在の私の職業柄、やはり教育の問題についても関心がある。

共同体では集団教育なので両親の許を離れ集団で育てられるというが、その方法が子供に与える影響はどうか。つまり子供の成長過程において両親の愛情、親子の愛情は必要ではないのかどうか。一日数時間会うだけで子供は平気なのかしら。単純な疑問が湧く。

教育水準についても、キブツにおける教師の役割についても知りたい。特に後者は婦人の解放を目ざす我々にとって、重要な視点となるだろう。育児、家事から解放されていることが本質的な婦人の解放なのか、男性と平等であるということはどういうことなのか、私自身のために明確にさせなければならない。

キブツに対して、先入観念を持たないために、参考文献にはほとんど目を通していない。

自分の目で体でキブツという社会を体験し、キブツの人々に接することから「生きる」ことを知り、自己の変革をはかりたいと思っている。それが私の人生の転機になるだろう。

だがキブツ研修生になれなかった場合には私はどうすればよいのか。自分自身のために教師をやめ、もう一度新しい生活を求めて行くだろう。そうしなければ私の人間性は死んでしまうとさえ思っている。

おわりに、稚拙な文章ゆえに、正しく何が焦点なのかぼやけている。さらに、随分自己中心的である。日本における共同体建設のためにいくという大義名分には従えない。しかし、共同体建設には参加しなければならないのだ。

施設のために

村上睦子

私は、昭和二十二年一月十三日、父清（当時結核性カリエスで入院中）、母トコの第二子、長女として生まれました。私が満五才の時、悲しいことに母は自殺死し、私は母無し子になりました。当時は父の病気と貧困、戦後の混乱が重複し、家は農業であったが、我が家は最悪の状態であったと聞きます。ともかく、私は父の兄弟たちのいつくしみと激励で、そして祖母の手で育ったように思います。

その後、父は病気回復し、私が小学校二年生の時、私財を投じて陽清学園という児童福祉法による養護施設を開設し、以来私は県内から集まってきた二十四名の、主として孤児たちとあたかも兄弟姉妹のように暮らし、なつかしい思い出になっております。それから継母が入り、兄と私は主として継母の手で訓

育され、高校を卒業したあと、一度は美容師になろうとして東京の美容学校を卒業しました。でもそのあと、父の意見を聞き、一ヵ年を陽清学園に勤務する等曲折があったのですが、生涯を児童福祉に投ずる覚悟を新たにして保育専門短期大学へ進んだのです。昭和四十五年四月より、父の経営する保育園に勤務して現在に至っておりますが、幼児保育の難かしい壁にぶつかっているというのが本音のところで、何かを見い出したい気持で一杯だというところです。

短大時代、秋田市の近江鄭氏からスライド講演を受けてキブツを知ったのがはじめてです。ちょうどその頃、陽清学園の園長をしている父も近江先生と親交があり、キブツについての学習に熱を入れ、いろいろな書籍を取り寄せていて、父を通してキブツの学習ができたわけです。特に西本とみさんの『キブツ・戦争・オレンジ』には感銘を深くしたような次第です。

私は、キブツにおいて、我が国の児童福祉施設とキブツの育児及び教育の比較を研究したいと思っています。最近ようやく、個性の尊重ということが言われるようにはなってきたものの、まだまだ保育者の姿勢が、小学校低学年教育体制を低くした、いわゆる黒板を背にしたチイチイパッパ式から脱し切れない体制だといわねばならないようです。これは保育行政の影響が大きいといわれますが、この貧弱な内容であっても、保育者自身の自負と熱意で改善できる問題が多いような気がします。

又、養護施設との関連においては、家庭にかわる場を提供する施設ですが、最近は社会の混乱に比例し、崩壊家庭からの児童が増し、疲労しきった大人達の生活がのぞかれるのですが、ともあれ、入所児童が年々増加しております。しかも人間尊重時代に入り、本質を究める体勢に入り、父の言葉を借りると、破壊されつつある家庭や人間性を、補修し改善する役割を担う養護施設の存在こそ意義あるものと感じ、キブツの赤ちゃんの家、幼児の家、子供の家等の養育ならびに教育内容が似ているところから、キブツの研究が必要と思ったものです。

昭和四十四年から三〇名定員の幼児と低年齢精薄児を治療訓練する施設も、保育園、養護施設とならんで経営していますが、世界的にみても人口の三パーセントの出現率といわれているところから、キブツでの精薄児処遇を見学し、研究したいものと願っているものです。

戦後に生まれ、戦後の教育を受け、戦後の世相に育てられてきた私ですが、イスラエル、特にキブツの人々の生活意識に触れて、その完全社会主義というか、人間平等性というか、生き生きとした活力に満ちた生活に強烈なあこがれを感じ、現代日本の虚栄に飾られた形式的生活意識や、マイホーム主義等という協同社会の原則から外れた個人主義的、利己的な打算にもとずいた物の考え方が鼻につき、どうにかしてこれを改善しなければと希いたい気持に駆られ、その思いが、保育業務に専念し、教育百年の基礎になろうと覚悟したものと思うのです。

私の育ってきた経験と現在の職場の状況から（四万坪の中に一町五反歩の畑と二町五反歩の牧野、そして四町歩千本の栗林、そして保育所と養護施設、精薄施設を経営しています。）、是非キブツで学ぶ機会を得て、何かを持ち帰りたいと願っての応募です。それと同時に、これは父の強い勧めであること、一年間の研修中は研修のための休職扱いにしてもらえることを附記しておきます。